

i-Construction 推進コンソーシアム 第2回 企画委員会

議事概要

日時：平成 29 年 10 月 5 日（木）16 時～18 時

場所：国土交通省 特別会議室 央合同庁舎 3号館 1 1階 特別会議室

出席：安宅委員、仮屋菌委員、小宮山委員、鈴木委員、建山委員、藤沢委員（50 音順）

事務局より、i-Construction の推進について（資料 1）、コンソーシアムの WG 活動について（資料 2）、i-Construction の普及・促進（資料 3）、3 次元データの利活用方針（参考資料）について、日本橋梁建設業協会より、i-Bridge について、PC 建設業協会より、PC 橋の生産性・安全性の向上等について、日本建設業連合会より、社会連携講座について説明し、意見交換を行った。

（主な意見）

【i-Construction の推進、i-Bridge、PC 橋の生産性・安全性の向上等について】

- ・ 建設分野は高度経済成長期に整備してきた膨大な社会資本をどのように維持していくか、というところで莫大な需要が見えている。
- ・ 生産性を向上させ、暮らしを豊かにし、より多くの仕事をこなしていくというところで、生産性の 20% 向上と言わず、より大きな視野をもって企画委員会を運営したい。
- ・ 労働人口が 2/3 になることを考えれば、少なくとも 50% の生産性向上がないと現在の建設を維持することは難しく、目標値をあげたほうがよいのではないか。
- ・ 自動化等については知恵を出せるため、「ムリ・ムラ・ムダ」が可視化されたものを確認したい。
- ・ 実際に i-Construction にトライした建設業者にヒアリングをすると、技術的なレベルが低いため外注している部分が多く、インハウスでできていない。価格や使いやすさのところでハードルがある。特に 3 次元データの扱いについては、価格、使いやすさの面でもう少し工夫が必要。
- ・ 発注者側で ICT の導入についての意識レベルが低く、企業側が持っていても発注者側が乗ってこないという場合があるため、意識改革が必要。
- ・ 過去の歴史を見ていると、マニュアル化し簡素化を進めていくことで、業界において重要な能力が消えてしまうケースがある。ICT を導入し、効率化していく中でも、人に依存し残しておくべき能力を見極めた上で、人材育成に取り組むべき。
- ・ ICT を使用した取り組みを数多く行っている中で、技術が十分でない、そもそも使用したくない、など様々な課題が出ているため、課題を共有し、全体で解決を図ろうとする取り組みがスピードアップのためにも必要。
- ・ H29 年の取り組みの中で、ベンチャーの動きを見るとシェアリングエコノミーなどが盛んである。また、地域における人材・建機の稼働状況のデータベース化、リアルタイム・オンタイムの人材・建機の適性配置など、マクロな見える化に取り組んでいる企業が出てきている。
- ・ 勇気を持ってベンチャー企業を活用したほうがよい。

【コンソーシアムの WG 活動、社会連携講座について】

- ・ 日本で大きな問題の 1 つは女性の活用が十分でないこと。また、高齢者の活用も十分ではない。64 歳といった年齢に囚われず、知恵として活用すべき。大学の名誉教授などは、女性の次に活用されていない。もう 1 つは人の流動性が足りない。産官学連携というが、人の流動性を高めることが重要。
- ・ 今回の連携講座も東京大学の中に作ったが、IT でつながることができるし、フィジカルな面でも国交

省など官と民間の優秀な方が一緒にやることで色々なことができるはず。

- ・ 勉強させるつもりで人を派遣し、官も学も一緒に育っていくことが重要である。ICTの専門家、土木の専門家が育っていかなければ、分野として伸びていかない。

【i-Constructionの普及・促進】

- ・ i-Construction ロゴマークについては了承。
- ・ 業界の方が元気になるための取り組みとしてこの検討方法でよいと思うが、ロゴマークをどのような場合につけたいかのみ、業界の方に聞いたほうがよい。また、すべてのものに貼るのか、ある条件を満たすと貼るのかは考えておいたほうがよい。
- ・ ニーズとシーズのマッチングの話もあったが、うまく進めるための方法として賞金を用意するとよい。
- ・ I-Construction 大賞もマッチングも現場からのボトムアップだけではなく、建設業界の構造的なビジネスプロセスの中でアイデアを出していくべきではないか。

以上